



「チョコレートケーキになさる？ それともアップルパイがお好き」と聞かれ、どちらも欲しいようなあるいは欲しくないような、迷い果てた揚げ句の接戦が4年前の大統領選挙だったなら、今回はチョコレートケーキだけは口に入れるものと決意を固めたアメリカと、アップルパイは見ただけで吐き気がすると思っているもう1つのアメリカの激突である。

——と、そういう評価がある。笑みをたたえた鷹揚なアメリカは、お互い憎しみ合って嫌い合うアメリカに変貌した。

テレビをつけると、ウソつきめ、ウソ言うな、あんたの言うことはウソばかりだと、耳をふさぎたくなるような罵詈雑言(ばりぞうごん)、使うものじゃないと大人が子供に教えてきたはずの言葉が、これでもかと飛び込んでくる。

大手紙が一面に掲げキー局ニュースがトップで伝える内容も、すぐその後でウソだ、でっち上げだと激しい非難の対象になる。実のところどこまでが事実の報道でどこからがためにするプロパガンダなのか、ニューヨークタイムズやCBSを見ていたのでは分からなくなってしまった。

▼97年の劇的生涯

アメリカ全体が余裕と節度を失おうとしているかに見える選挙の終盤、1人の戦略家が亡くなった。

ポール・ニツェ(Paul H. Nitze)。自分の名前を冠したイージス艦が来春就役するというので、イラクで勲功を立て艦長になる予定の軍人と握手をしている姿がカメラに納まっている(写真 US Navy)。それが9月30日のことだった。その19日後、ワシントンで肺炎のため息を引き取った。享年97歳。



長い生涯にはいくつも特筆に値する業績がある。

冷戦下の 1982 年、レーガン政権の特使として兵器削減交渉に当たっていた某日のこと、当時のソ連側代表と 2 人きり、肩を並べて会場場所に程近いスイスの林を散歩した。この破天荒な「林間の散策」は、膠着をほぐす突破口をもたらした。やがて伝説となり、**演劇化されて**、ブロードウェイで当たりを取った。

▼NSC68 と日本

戦後の秩序を作った父性の権化という形容が、小柄なこの人物に関して思い浮かぶ。

かつて一度だけインタビュー（**後掲**）をした時、日本を打ち負かした後のアメリカがどんなに腑抜けのようになっていたか、二度と再び世界なんかと関わるものかと思っていたか、静かに説いてくれた。そこを巻き戻し、折から高まる一方だったソ連の脅威に正対させることが、政治的・経済的に、何より国民心理のうえで、どれほど難事だったか――。

国務省政策企画局長だった 50 年 4 月、まさにその必要を 2 万 5000 余字に託して大統領に具申したのが、後に「巻き戻し論」「対ソ封じ込め政策」の綱領と呼ばれることとなる「**国家安全保障会議文書第 68 号 (NSC68)**」である。当時の最高機密文書は、今や容易に入手し読むことができる。

公文書として異色なことに、米国を「**this Republic (わが共和国)**」と呼ぶ独特の美文調によって綴られている。自らを変えようとする決意を込めながら、歴史の審判を畏怖しつつ記したところに起因した格調であり、文体だっただろう。

そして本当に、米国はこの時以来、変わった。平時の巨大な常備軍という、今日見慣れて誰も異としない米国の制度は、まさしくこの文書を契機に作られたものだ。ソ連の挑戦にひるまぬ覚悟を米国に強いた文書は、日本に自衛隊を持たせ、戦後日本の方向をも決定づけた。「平和憲法」以上の影響力を日本に及ぼしたと言えるかもしれない。

▼孤独で、一方的な決断だった

米国が奉じる価値とは何かから、文書は説いている。日本はもとより欧州でもその後長く、共産主義を礼賛する思潮がむしろ主流を占めた。戦時は米国でも、 Kommunismus の同調者が少なくなかった。戦後金融体制を構想し英国のジョン・メイナード・ケインズと渡り合った財務官僚、ハリー・デクスター・ホワイトは、人も知る共産党シンパだったほどだ。

だからニツツェは、米国を米国たらしめる価値と力を定義するところから書き起こした。そして米国は、ここで定めた礎石を離れず、自分を疑おうとしなかった。西側世界はこの時米国が固めた決意によって不動の座標軸を与えられ、それは 40 年後、ソ連を打ち負かす結果となって最終成果を収める。

NSC68こそはあらゆる意味において、戦後世界を作った基本文書だったのである。

米国は自然に、または自ら好き好んで、世界に押し出したのではなかった。居心地よく内にこもりたがる国民と、ソ連に関する情勢判断を共有しようとする諸国民の抵抗をニツツェら少数のエリートがはねのけ、無理にも作り上げた産物が、今日の世界であり、米国である。孤独と言えば孤独、一方的と言うなら一方的この上なかった米国の決断に、世界は今も多くを負っている。

今日米国内外の論調が、せめてこうした歴史の経緯を踏まえたものであったらもう少し静かな、落ち着いた議論ができていたと思えてならない。

再掲インタビュー(日経ビジネス 94年1月17日号掲載)

冷戦後の今こそむしろ、米国の世界に対する影響力はいやでも増大していく。世界に軍事対立の懸念が消えたわけでは決してないからだ。ここで何事かなし得るのは唯一米国のみである。

米国の意向を考慮に入れなければ、重要な物事は何も進まない。米国の指導力は、今後増していく。その米国と友好関係を保つことは、日本にとって非常に大切なことであるはずだ。

第2次大戦後、米国民はみな故郷で穏やかに暮らしたかった。しかし、世界がそれを許さないことをトルーマン大統領とフォレストル国防長官はじめ米国の指導者は悟り、国民に向かって世界からの撤退は不可能だと説いた。

今でも同じだ。我々はできれば暮らしを楽しみたい国民だが、世界にかかわらざるを得ないように生まれついている。クリントン大統領は元来、トルーマンに匹敵する力を持つ。新聞の見出しより国の将来に注意を集中し始めたここ数カ月の間、彼はその能力を示しつつある。経済力に見合う建設的役割を果たしていない日本に、そうするよう仕向けるのも彼の役目だ。

(Nitze の発音は本来ニツツァに近いようだが、日本の慣例ではニツツェと書くことが多い。文中敬称略)

(谷口 智彦=編集委員室主任編集委員、ブルッキングズ研究所 CNAPS フェロー)